

## 愛媛大学教育学部教員養成課程の第6回学校動物講習の後評

平成30年4月

愛媛県開業獣医師会

愛媛県開業獣医師会（ベッツーえひめ、以下本会）は、平成24年から愛媛大学教育学部の学校教員養成課程の学生に「学校動物」の講習会を行っている。これまでに受講者は200人を超え、毎回講義時質疑応答や学生のレポートを参照に、講義や今後の課題について改善するために、本記録を作成し、当会のHPで公表している。

第6回講習会（平成29年12月4日）は、参加者約30名。本文の参照レポート17名。

本講習会の趣旨は、在学時に飼育経験がないことや苦手意識を緩和、解消して、動物に触れる先生になる、学校動物の飼育に関する適正な飼育知識や法令（テキスト配布）を知る、将来先生としての教育に活かす機転を作ることにある。

過去5回分の評価については、第5回の評価と合わせて総括し、HPに掲載している。今回は前回までと重複する部分はあるが、変転していると感じる部分を主に述べる。

### 1. 受講生の動物に対する意識の変遷と変位

本講義の最大の目的は、ペットの犬や猫などの飼育経験や昆虫などの生物にも触れる機会がない、その他さまざまな理由で動物を敬遠する先入観による苦手意識を、緩和あるいは解消する機会とすることである。

動物や生き物に対する苦手意識の原因は、さまざまであるが、まずその原因についてほとんどの人が思い当たる記憶があり、見直す機会になっている。学校動物の意義や適正な飼育に関する意識が生まれ、関心が高まり、将来への教育課題へと進展している。何よりも、複数回受講している学生がいることは、当会としては嬉しいことである。

動物の苦手意識や経験が少ない点を解消する効果は、講義の後半でさまざまな動物に実際に触れることにある。特に、蛇やトカゲなどの爬虫類は触れる機会がないための、視感などによる漠然とした先入観を緩和あるいは解消する効果が見て取れる。多くの学生が、犬やウサギなどの恒温動物と比較することによ

て、いわゆる苦手意識が軽減する、意識がリセットされることは今回も確認された。

## 2. 教師としての生命や死への意識

今回も、学校動物飼育よって、生命の尊厳、寿命、死、虐待、いじめ、思いやり、忍耐、連携、仲間意識を考える機転になったとことを挙げている学生が多い。その中で、一つ上げれば、飼育動物の「死」に対する考え方が変化しているようで、忌避するのではなく、現実として生徒に接すると考える学生が増加している傾向がうかがえる。

## 3. 動物飼育の責任と義務

学校動物は、閉鎖環境で飼育されている以上、先生と生徒による適正な飼育管理、観察力、忍耐、継続性、連携などの義務や責任が必然的に伴う。その上で、先生の役割が、生徒への平等な機会供与と補助、観察力の助長など具体的な指導につながる認識も生まれる重要性も伝わっている。

動物を飼育管理する上で、人畜共通感染症や、特に生徒のアレルギーの問題を回避することの配慮も認識されている。

動物の疾患予防や治療は、地域の獣医師が対応するとの認識も広がってきている感がある。できれば、事前に地域の動物病院とコンタクトしておく方が良い。

## 4. 学校動物の飼育に関する法令遵守

講義では時間の制限で、適正な飼育管理に関する様々な法律や指導指針については触れないが、講習会で配布したテキストを参照してほしい。

## 5. 動物のふれあい体験

今年も講義の後半に、犬、ウサギ、モルモット、ハリネズミなどのほ乳類や、蛇、亀、トカゲなどの爬虫類はじめ、多種多様な動物に触れる時間を設けている。今回も、動物に近づき、触れることで、動物に対する近親感や苦手意識の解消効果が得られた。前述したように恒温動物と変温動物の比較体験は、効果的であった。また、うさぎやモルモットでは、解剖生理的な特徴の着眼、動物が安心する抱き方などの体験と同時に、体温、心拍動、匂いや排泄物も生命の実感や様々な

発想が生まれる経験の効果は認められた。参加獣医師の助言も役に立っていると確認された。

#### 後記

本講義は、将来の先生が動物への対応を準備するための基礎知識と触れあう事による苦手意識の緩和や解消にある。展示した犬はいわゆる保護犬である。社会的には、野良猫や保護動物、殺処分の問題が論議されている。原因は、人の動物に対する飼育管理責任や意識が根本にある。将来、これらの社会問題の解消につながる事を望んでいる。

以上